法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

特集私たちのみた世界 ： ヨーロッパのバス旅行 ： 3.山国スイスで感じたこと

牧野内，倭文

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
39
(終了ページ / End Page)
40
(発行年 / Year)
1967-03-21

で、ひよいと小脇にかかえたり、乳母車の中につつこんだり、自転車の荷台にしばりつけたりして帰るのである。モンルソンで見たあるこどもは、靴の紐をしめなおすために道路に直接パンを置き、しめ終るとまたむぞうさにパンを持つて、そのパンをかじりながら帰つたのである。日本人の感覚から見ると不潔に思えるが、空気が乾燥しているうえに町がきれいなので、そう不衛生と思わないらしいのである。因に、ドイツでは焼きたてのパンは体によくないから、1日たつたものを売らなければならない、という規則があるそうである。

フランスの主婦は、地下鉄とかバスの料金の値上げにはそんなに関心を示さないが、ことバケットの値上げとなると、大デモンストレーションを行なうなどして、値上げを絶対に阻止しようとする。バケットの値段がいかに生活に関係があるかわかろうというものである。パリではラフシイール（腕の太さ位で長さ40cmのパン）は0.42フラン（約31円）、そしてラフゲー（直径10cm位で長さ60cmのパン）は0.8フラン（約59円）とのことであつた。

フランスというとすぐ「花のパリ」などといつて、華やかな面ばかり強調されるが、パリを一歩出ると（パリ自体は大都会にちがいないが）、一面の小麦畑がうち続く。それもそのはず、全面積の91.7%に当る5.516万haが農地面積で、不毛な土地は1.135万haしかないという広大な農業国なのである。農業人口は全人口の22.8%を占め、毎年の国民所得の20～25%は農業がもたらしているのである。これは農業生産の豊かさを示すものである。イタリアの小麦は軟質小麦で、パンを作るのに適さないが、北フランスの硬質小麦はパン小麦とまでいわれていて、フランス人はヨーロッパで一番おいしいパンを食べているのである。私はスープが来るまでの間、何もつけないでパンを食べたが、おいしさにつられて食べすぎ、パンだけで満腹になるほどであつた。

学部4年　生野啓子

3．山国スイスで感じたこと

スイスでまず感心したことは土地を有効に利用していたことである。スイスは全国土の2/3が急峻な山地で占められているにもかゝわらず、その約半分を耕作地及び牧畜に利用している。

私たちはインターラーケン・オストからアイガーの北壁を貫いてユングフラウヨッホ（3454m）まで通じている登山電車に乗つた。この時にスイスが土地を垂直的にどの様に利用しているかがよく解つた。登山電車は海抜約500mから出発し、アルプスの氷河から石灰岩を溶して流れ出した白く濁つた川に沿つて美しい谷間を登つていくのである。高度およそ1,000mまでは砂糖大根やじゃがいもの畑が見られる。美しいユングフラウの山が近づくにつれて、急傾斜地に緑のじゅうたんを敷いたような牧草地が拡がつてくる。その緑の中で牛が静かに草を食み、丸木で作つたス

イス独得の家が点在しており、どこを見てもすぐ絵になる美しい風景である。森林限界（約１８００ｍ）を過ぎても牧草地はなお続き、雪の点在している2,２００ｍまで牧草が生えていた。しかもこの牧草はすべて栽培されたものであるそうだ。これを見てスイスでは農地としての土地利用は、限界の限界まで利用しきつているように見えた。

私たちはロザーヌの北方数Ｋｍのところに住む、フイツシヤー・ウイツチさんと言う移牧をしていない農家を訪ねた。突然の訪問にもかかわらず主人夫婦はバイまで焼いて私たちを歓迎してくれた。この家の家族は１６才と１２才になる息子のほかアルバイトに来ている女の子がいた。この農家では１２ｈａの農地を持ち１０頭の親牛と８頭の子牛と１頭の馬と１００羽のにわとりを飼つていた。牛から得る収入は小遣い程度であつて第一の収入源は砂糖大根で、そして次にジヤガイモ、次にトウモロコシであると言つていた。

家の中に入るときれいに磨かれた床、古い調度品、オルガンを弾いて唄を歌うおばさんの声、すべてに調和が取れていたがこの地方では中農の下位であると言うのには驚いた。

スイスは四つの言葉の地区に別れている。ドイツ語地区、フランス語地区、イタリア語地区、そしてロマンシユ語を話すロマンシユ語地区である。（公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語）高い山がほぼ中央を西東に走つているためにそれぞれ孤立化して四つの言葉が混ることなく、またスイス独特の言葉が生れることもなく四つの地区がはつきり分れているのであろう。そのために峠を越えたとたんに同じスイスなのに話す言葉も周囲の感じも違うと言うことがあつた。この家のアルバイトの女の子はドイツ語地区からこの農家のあるフランス語地区へアルバイトを兼ねながらフランス語を覚えに来ているそうである。そしておじさんの息子も来年はドイツ語地区へアルバイトに行くのだと話していた。

スイスは決して恵まれた自然環境ではないのに、その自然を観光や農業に巧みに利用し、人々は落ちついた素朴な生活を営なんでいることを感じた。

学部４年　牧野内　倭文

４．イタリアからアルプスへ

イタリアの夏は暑く雨がふらないというのが通説になつている。８月１４日の筆者のメモには「午後２時２０分頃フイレンツエからローマ間のアウト・ストラーダ。空に雲一点もなく、焼きつけるような太陽の下に、「太陽の道」を車は走る。熱のために「太陽の道」は雨あがりのようである。車はタイヤの摩擦を防ぐためスピードを落す。しきりに渇を覚ゆ。あと３０分我慢を要する」とある。コモ付近の車内温度は３４℃、ミラノでは車内温度３６℃、直射温度３８℃で、ローマ付近で